東長寺所蔵『開祖即禅実相大和尚伝記』の紹介と翻刻

佐竹隆信

はじめに

日本仏教史を概観してみると、戒律が衰微すれば、その都度戒律復興の運動が行われてきた。その運動は江戸時代になってもみられ、明忍（一五八五～一六四七）をはじめとする多くの律師が活躍するに至った。その中の一つに学如（一七一六～一七七三）等を中心とする有部律復興運動がある。これについては過去に些かの考察を行った。しかし、当時この主張に対して反論を唱えた人物もいた。その一人が四分律派の流れを汲む実相（一七〇五～一七六八）である。この二人の論争は有部律復興運動を解き明かす上で、重要な問題であるといえよう。それに先だち本論考では実相について些かの紹介を行いたい。また資料として東長寺所蔵の『開祖即禅実相大和尚伝記』[一]（以下、『実相伝記』・写本現存）の翻刻を論文末尾に附す。尚、『開祖即禅実相大和尚伝記』を用いるに際し、研究のご許可をくださった東長寺・藤田紫雲師、複写を贈っていただき、様々なご教示をくださった千如寺・喜多村龍介師には、ここに記して深く感謝の意を表したい。

実相律師について

現在、実相に関する資料はほとんど現存していない。上田天瑞氏も「筑前千如寺の律僧…中略…大鳥派の系統を引く人」と考察をしているが、詳しくは言及していない。[二] しかし、この度東長寺[三]に実相の伝記が現存していることが確認できた。そこで東長寺所蔵の『実相伝記』をもとに実相の略歴を述べてみる。実相は藤原氏の血筋で、法諱を実相、字を即禅といい、九州雷山の人である。実相は宝永二年（一七〇五）四月二〇日に誕生、幼少より優秀で、七歳ではすでに経典を学んでいた。また十三歳になると金剛浄院宥範師の門に入り、祝髪した。その後、二十一歳になると東武（武蔵国東部）へ遊学し、様々なところで研鑽を重ねる。霊雲寺の慧光和上からは八斎戒を受け、威儀を学び、大鳥神鳳寺においては、観慧和上より沙弥戒、三聚浄戒を受ける。その他広く遊学し、天台等にも通じていた。この後、筑前に帰郷し、千如寺の復興に努め、明和五年（一七六八）九月二日、法臘三十九、六十四歳にして遷化される。帰郷してから遷化する間、学如との論争が行われた。詳しくは左記の年表を参照していただきたい。

年号	年齢	概要
宝永二年乙酉（一七〇五）四月二十日		井上氏のもとに誕生。
正徳元年辛卯（一七一一）	七歳	経典を習い始める。
享保二年丁酉（一七一七）	十三歳	出家して千如寺を復興することを誓う。
享保四年戊戌（一七一九）秋	十五歳	金剛浄院[四]宥範師の門に入り、後に海公[五]に師事する。
享保七年壬寅（一七二二）	十八歳	海公より潅頂を受ける。同時に、この頃より戒律に対して深く関心を抱く。
享保十年乙巳（一七二五）正月	二十一歳	東武（武蔵国東部）に遊学する。最初は霊雲寺の慧光[六]和上のもとで八斎戒や菩薩戒を受け、律典を学ぶ。
享保十一年丙午（一七二六）冬	二十二歳	三井寺の義瑞[七]和尚に師事し天台の教観を学び、後に湛慧[八]和尚に倶舎を学ぶ。
享保十二年丁未（一七二七）秋	二十三歳	大鳥派の観慧[九]和尚に師事し沙弥戒を受ける。その後律学を研鑽する。
享保十四年己酉（一七二九）十月	二十五歳	五十日間、本尊に懺悔し観念すると好相が表われ、三聚浄戒を発得した。

享保十五年庚戌（一七三〇）十一月	二十六歳	観瑞[十]和尚の勧めで和泉国の吾孫子精修寺[十一]の住職になる。また報恩院流を観慧に、学雄の法[十二]を義鳳[十三]和上に、房玄[十四]の蘊を五智上人[十五]に、西大寺の秘奥を慧照律師に、安祥寺流を観慧・弘道・慧照の三師に、西院流を妙観和尚[十六]より受けた。
享保十九年甲寅（一七三四）八月	三〇歳	五年間の安居を成満する。
享保二〇年甲寅（一七三五）	三十一歳	筑前に帰って金剛淨院の住職になる。この後、功崇公[十七]の依頼（子供を授かる）を受け祈祷する。
元文元年丙辰（一七三六）四月十六日	三十二歳	千代君[十八]が誕生するが、若くして亡くなる。
元文二年丁巳（一七三七）九月十日	三十三歳	左京君[十九]が誕生する。
元文三年戊午（一七三八）四月十二日	三十四歳	左京君に続き宮内君が誕生し、霊験を示す。しかし、それを信じない者が周りに多かったため宥観[二〇]を代理に立て、退く。その後七、八ヶ月の間、布教に専念する。その後、和泉国の精修律寺に移る。
延享二年乙丑（一七四五）夏	四十一歳	神鳳寺にて律蔵を講演する。

宝暦元年辛未（一七五一）	四十七歳	本州を巡り、研鑽を積む。この時、再び功崇公のため（筑前国の繁栄）に祈願を行い霊験を示す。
宝暦二年壬申（一七五二）六月	四十八歳	実相再び筑前に戻り、功崇公の支援を受け千如寺の復興を始める。この時、御堂に千手観音や不動明王、毘沙門天を、その他にも吉祥天や弁財天を安置した。
宝暦九年己卯（一七五九）三月	五十九歳	新しい御堂の落慶を祝して、伝法・持明・結縁の三種灌頂を行う。
明和五年戊子（一七六八）	六十四歳	春に寺を喜捨し、後事を湛道上人に託す。九月二日、法臘三十九、六十四歳にして遷化される。
慶應三年丁卯・明治元年（一八六七）九月	百回忌	龍尊[二十一]が『開祖即禅実相大和尚伝記』を著す。

実相律師の著作

実相は「宝暦辛巳至明和乙酉中間六七年修法之外講授與操觚循環無虚日又伝授野澤法流暨秘密儀軌禀其相承秘訣者十有餘人[二十二]」とあるように広く教えを伝え、同時に多くの著作を残した。伝記によれば、実相の著作は『大日経教主義』『顕密教時義』『密宗網義』『秘密一乗尸羅眼髄』『阿字観秘策』『自誓受戒

方軌』『旭照霜露編』『六相自然一掌鏡』『西院流系統記』『安流法脈記』『三宝院相承記』『三安西不同記』『同雑要鈔』『千手大法次第』『安流呼麼次第』『普通諸尊随行次第』『西院伝授口訣』『請雨秘法次第』『不空羂索祈雨法止風雨経法』『建壇結解次第』『地鎮次第』『摩利支天法』『西院六種護摩通行次第』『後七日大壇呼麼壇法』『西院灌頂初後夜三昧耶戒作法』『西院流區區袖中録』があるとされる。[二十三] しかし、現在は『国書総目録』[二十四] でも『大日経教第三重評判』[二十五]『秘密一乗尸羅眼髄』『阿字観秘策』『旭照霜露編』のみしか確認できない。

また『旭照霜露編』は、学如の『真言律行問答』に対して反論を唱えた書である。その有部律派と四分律派の応酬（著作による論争）については、上田天瑞氏が左記の図を用いて指摘されている。

学如・真言律行問答
- 法明・密宗学録童問―龍海・陀羅尼宗所学有部律儀―智明・釈弁囿録
- 実相・旭照霜露編―学如・弁旭照霜露編

図：（上田天瑞『戒律の思想と歴史』より引用）

この『旭照霜露編』の奥書[二十六]には「明和五年戊子正月自誓受戒菩薩戒苾芻即染実相閣筆於築紫雷山千如寺瑜祇室」とあるため、実相の最晩年の書であることが分かる。その内容については別の機会に期したい。

一　今回、東長寺・藤田紫雲師、並びに千如寺・喜多村龍介師のご好意で『開祖即禅実相大和尚伝記』の電子複写を送っていただいた。そのため書誌情報については、詳しく述べることができない。

二　上田天瑞『戒律の思想と歴史』三三五～三三六頁

三　福岡県博多区の南岳山　東長寺

四　金剛浄院とは千如寺 大悲王院のこと。（『日本歴史地名大系』第四十一巻七七一頁）
　また千如寺については吉田扶希子氏「雷山千如寺に関する一考察」に詳しい。吉田扶希子氏によれば、「雷山千如寺は、福岡県前原市大字雷山字下谷（旧糸島郡雷山村雷山）にある。…中略…『雷山千如寺縁起』によれば、聖武天皇のころ、清賀なる「法持の上人」がこの山に寺院を建立して雷音寺と称したが、後人、改称して千如寺となり、一時期は僧房三百坊を誇ったが、後、諸坊退転して、現在は大悲王院のみとなった。」とある。

五　宥範の師か。詳細は不明だが、『実相伝記』に「我少シテ留二学智積一ニ」とあるように五百仏山 根来寺智積院に関係のあった人であろうか。

六　湯島霊雲寺第二世

七　園城寺法明院を中興した天台僧。（鷲尾順敬編『日本仏家人名辞書』）

八　長時院中興第一世

九　快運房観慧のことか『神鳳一派僧名帳』（稲城信子『日本における戒律伝播の研究』九十四頁上段）

十　観慧和尚のことか

十一　現在は廃寺か

十二　覚雄方のことか

十三　薬性寺僧

十四　地蔵院流の一派

十五　五智山蓮華寺の曇寂

十六　紀生護国寺の僧か
十七　黒田継高（九州歴史資料館編『筑前怡土　雷山千如寺大悲王院』三十七頁）
十八　功崇公の長子
十九　功崇公の次子
二〇　実相の法弟
二十一　江戸後期～明治期の千如寺僧。
二十二　東長寺所蔵『開祖即禅実相大和尚伝記』中
二十三　東長寺所蔵『開祖即禅実相大和尚伝記』中
二十四　『国書総目録』著者別牽引　四〇八頁
二十五　『大日経教第三重評判』は『開祖即禅実相大和尚伝記』の中に明記されていない。
二十六　龍谷大学所蔵『旭照霜露編』中

〈キーワード〉『開祖即禅実相大和尚伝記』、東長寺、千如寺

『開祖即禅実相大和上伝記』翻刻

［凡例］

一、本翻刻は東長寺所蔵の『開祖即禅実相大和上伝記』を翻刻したものである。

一、漢字表記は概ね底本の通りとした。異体字については常用の書体に統一した。

一、振り仮名、送り仮名の表記も底本通り翻刻した。ただし「𠬝」「丿」「冂」「寸」は「ナリ」「トモ」「シテ」「コト」「トキ」と開いて表記した。

開祖即禅実相大和上伝記

師世系ハ藤原法諱ハ実相字ハ曰二即禅本州雷山ノ人也宝

永二年乙酉四月廿日降二于郷之井上氏一其母王神

氏嘗祷二視音大士一二分娩不レ加レ病焉生而聡浜骨相倫超

レ倫七歳二シテ受二習□経典一吾伊上レ口二能誦ス里閭嘖以二神童一

称ス比レ及二総卯一二月望父携而寺詣レ寺拝二如来涅槃像一涕

泣弗レ輟悲歎如レ溢於胸一二然リ見者作二希有之想焉十三

歳ノ時自奮勵シテ曰吾聞窆古天孫綰ニ御スル我蜻之洲一也降
二臨層増岐嶽一垂二夷賊降伏冥祐一以鎮二護ス海内一故二暦朝
崇二敬其徳威一覇主亦代々納二圭田一自三清賀上人開二基ヨリ佛
閣一法系連綿不レ絶傷矣哉近古ノ暴将投二入寺封一之
後山門寥々乎トシテ廃頽日甚我生而在此地也焉能
忍レ見レ之必出家シテ而興二復之一矣父母未二輙□許可一因循トシテ
累レ日歴二三年一而終得レ遂二夙志一享保巳亥秋投二金剛
淨院宥範師之門一祝髪範公授二レハ之ニ梵経一輙ク能ク記得ス
識者以為二不レ易レ得之材一矣一日猛省シテ曰凡世人之
挫レ志多為二色境一所レ奪我必断レ之及嚙レ臂而盟其後
渡二州之鹿島一尅二七盡夜一専誦二神咒一旁書二寫般若一以
文請ス於文殊尊ニ一ニ益秘典中ニ有三滅姪ノ呪一之故也常以
レ無二ヲ明師一為レ慊時ニ照海遮黎唱二道ヲ南嶽一範公携レ師参
謁海公一見シテ喜動二眉睫一甚器レ之乃教二授宗義一兼講二法
華維摩起信一師以三具所二了解一偶陳二函丈一則海公歎シテ曰
我少シテ留二学智積一ニ閲二学賓一者歳以レ百数然トモ如レキハ子未二之レ有一

1 みせけち「祈」

矣宿習ナル乎哉又従而修二習十八道行軌一尋行二両界大
法曁護摩瑜誡恒持二誦法華一至二常在霊鷲山之句一感
喜交集潛然□□□不レ得レ揚レ声亦足三以窺二観ルニ其為レ人矣壬寅
春三月拝二海公一浴二五智法水一嘗自概二戒珠之不レ完喟然トシテ
曰雖三我既禀二三昧耶ノ宝戒一未レ知二持犯之実一苟非二顕密大
小ノ戒品玲瓏円満一ルニ豈謂二之ヲ金剛子一ト耶於レ是乎跂二南詢一益
入律之本初也乙巳春正月歳二十一ニシテ遊二学東武一乃自
要言シテ曰我今之游方ルヤ也為レ法身苟不下ンハ参二シテ於賢師一以
得中大法上矣テ無レ還二于故国一其為二行装一一笠一杖法衣
瓶鉢之外都テ無二長物一大布ノ鬱上多羅如二真ノ應真一初隨二
霊雲慧光和上一禀二八関齊戒一習三学威儀一諮二決ス持犯一
以三注念年久一キヲ滞義頗釋然タリ矣後謁二室泉廣慧和
上一受二菩薩大戒一孜々トシテ請益ス未レ幾慧公移二錫ヲ於攝之
住江一ニ師亦執二巾瓶一従ヲ博詢二律典一南山章疏三大諸部
隨レ聞通図ス明年丙午冬隨二三井義瑞和尚一学二天台ノ教観一
殆了二玄義一厥後僑二寓諸楽一ニ問二倶舎ヲ於湛慧和尚一兼質二

賢首慈恩ノ諸疏ニ浩々タル性相頗得ニ義髄ニ其負ニ笈ヲ東西南
北ニ之日資縁薄少ニシテ豆滓當レ飯繿縷露レ肩而不レ顧ニ人之
訾笑ニ寸陰是競其覆ニ述ルル所レ習也褒ニ然タリ乎儕輩ニ衆感歎
服丁巳[2]秋八月随ニ大鳥山観慧和尚ニ納ニ息慈戒ニ籍ニ干神
鳳僧寺ニ恒閲ニ諸律ニ増ニ廣ス知見ニ己酉冬十月入ニ好相壇ニ五
旬静座懺ニ悔ス□罪ニ感ニ本尊佛母親現ニ相好光明ノ身ニ十二
月五日辰時上分中発ニ得通受苾芻三聚浄戒ニ事務
之暇撰ニ自誓受戒方軌ニ賓ニ諸ヲ神鳳ノ知事寮ニ以資ニ進具之
行用ニ其軌見行ニ於僧坊ニ翌年冬十一月承ニ観瑞和尚ノ顧嘱ニ董ニス
泉州吾孫子精修寺ニ々頗破壊而乏ニ資糧ニ及ニ師之開ニ法化ヲ
郷之豪富八木氏ナル者附ニ斎田若干ニ以賑ニス食輪ニ尋喜ニ捨浄財ニ
一ニ新諸本尊及百法器ニ寺規寖備ルル於レ是乎為ニ神鳳□
下ノ望刹ニ矣在ニ泉南ニ之日多訪ニ良師ニ把ニ野澤ノ源委ニ稟醍
醐憲深ノ流ヲ於観慧和上ニ学雄ノ法ヲ於義鳳和上ニ房玄ノ蘊ヲ
於五智上人ニ西大寺ノ奥ヲ於慧照律師ニ安祥寺ノ秘ヲ於観
慧弘道慧照ノ三師ニ西院流ヲ於妙視[3]和尚ニ師嘗曰我大師ノ

2 「未」の誤りか

3 「観」の誤りか

法水雖三原出二于青龍ノ一源一ニ乎先哲授受異レニシテ轍蘭菊競
レ美遂分レテ為二十二及ヒ七十餘流一ト而其四度潅頂諸尊ノ軌
儀口決等汗レ牛充レ棟殆乎向ニ一ントス萬餘巻一ニ以二有レ限之命一欲三トモ
偏学二一ント諸流一ヲ終ニ恐クハ唇腐歯落ン抑於二我身一ニ宿縁ノ所レ有固ニ
不レ可レ測焉於是恭対二両部曼荼羅暨八大祖師ノ像前一ニ
欲レ決二之神鬮一得レレハ籤則在二西院一疑念シテ曰我於二小野ノ諸師一嘗
得二親炙一コトヲ以堪レ可二伝授一在二テハ西院一則欲レ干レメント之而無レ由也豈神占
未レ為二我地一ヲ邪亡レ幾叅洲大巌ノ二公自二東関一致レ書曰我等有二
西院相承ノ宿望一聞紀之妙観和尚頗得二彼流ノ壺奥一而我輩
之於二ルル彼師一非レ所二□ト識一ル子其図レ之師頓二知曩者神鬮之厚
レ己也乃諾レ之遂袖レニシテ香抵二南紀一謁二和尚一ニ於護国寺一自陳二澤
流相伝ノ之志一兼致二二士ノ願意一和尚随喜甚厚於レ是乎與二
二士一相倶ニ投二錫ヲ於彼地一三年ニシテ而竣レ功益法社之嘉遇豈
前縁之所レ致歟伝授之日筆二受和尚ノ口伝一以備二後日ノ遺
忘一其記輯テ成二十四巻一題曰二西院ノ口決一珍二秘ス干當院一師雖三
博挹二諸流一殊以二西院一弘通ル為レ是カ故也又隨二薬性寺義

鳳和上ニ禀ニ大日経疏暨秘密儀軌ノ講伝一其後謁ニ曇寂上人ニ
於五智山一参ニ決□観門一歴ニ受秘訣一殆乎盡ニ幽致一阿字観ノ発
軫益肇ニ一ル干斯時一ニ矣大氐野澤ノ法水瀉瓶不レ漏顕密ノ義蘊モ
亦蔵ニ心腑一克ク酬ニ一ル其言一ニ哉甲寅ノ秋八月師五夏制満明年
春帰ニ干筑前一省ニ覲本師及双親一時範公老厭ニ事務一謀ニ譲
レ席鋪レ法師固辞トモ不レ可卒ニ董ニ一ス席ヲ金剛淨院一先レ是ヨリ本縣並原
郷住吉社ノ別當了禅感レ癲偶見レ師曰仏法東漸シテ隆ニ一ナリ于
上国一今将ニ西帰一ント雷山法幢ノ之振必在レ近矣病瘥之後
不ニ自ラ記レ所レ言益病中多蒙ニ神ノ之示教一云三雲邨ニ有一老
嫗一恒信ニ三宝一ニ夢見下両箇ノ日輪並テ懸ニ干天一其一化ヲ為ニ沙門俄
頃飛テ入中雷嶽上寤甚奇レ之数日而詣レ寺視ニ師之容貌一不レ殊レ所
夢乃告ニ以レ実師ノ曰是汝信力之所レ感也於レ我乎何有遠近
聞知シテ無レ不ニ歎異一焉居亡レシテ幾名翼遠飛聞ニ干邦家一是時
功崇公憂レ無ニ継□乃囑レ師ニ祷レシム之師曰沙門為レメニ他祷ルハ職身況
於ニ公候大人一乎何為辞レ之於是開ニ壇ヲ於四月十六日一以至ニ
七月十七日一要ニ期シテ九旬一□ニ祷ス於明神盥視世音尊一比レ及ニ

七日一有二小白蛇一出二於中宮ノ扇前一蜿屈シテ如円珠一人往還而不
レ動顧二神明之應感耶一昔弟子後山夢ラク上宮明神謂己
汝之師雖三為レ国凝二ト丹款一乎慢而未レ伏二我倒一強テ與二其ノ希望一ヲ
則起三憍誇ノ心一立ニ招二ン枉難一ヲ惟神ハ主二聡明正直一苟モ人能至減トキハ則神
必従二其所願一汝以二我言一告レ之俊山拝跪粛然ナル者久レ之便□ム
益明神特告二其従弟一者豈風諭之至レル者耶其後中宮雷電神
排二殿戸一出厲レ声曰即禅カ即禅カ呼汝昏二醉無明一耽二著世味一将ニ
隨二落名利ノ□穽一我未二奈レ之何一也執レ肩擲二於社壇之外一心アッテ焉
夢寤徧身沐レ汗師於レ是乎淘二汰先非一持念彌確是歳秋八
月侍婦人有レ娠翼歳元文丙辰四月十六日春千代君誕
彌師欲レ謀二孺君長成之事一上疏シテ以聞有レ故不レ達二于左右一六月
十六日　公子夭ス国相謝シテ曰向ニ師所レ示之言私ニ容二疑心一今
邦家之不幸ヤ也実我曹ノ之大過ナリ矣師曰世雖二譏季一瑜誡ノ霊
効不レ可二軽蔑一也不レ累二年月一再示二サン其験一ヲ矣抑降誕以後ノ長否ハ籍二邦
君暨重職之信力一耳自レ此亦請二祈ス観世音暨明神一持念勇鋭ニシテ修供
積レ功丁巳ノ春正月側室懐胎ス其九月十日誕生ス左京君是也生而

東長寺所蔵『開祖即禅実相大和尚伝記』の紹介と翻刻

叡相　公喜慰無レ已ムコト師告ニ以三長生之法一明年夏四月十二日
宮内君誕ス陳二ルコト長□之法一ヲ如レ初謂二国老一曰今建白コト如レ此益虚実ハ
竢レ時而著レン矣其気宇概類二于此一師奉二シテ国命一祷二嗣君一也自二享保
乙卯一至二元文戊午一避二鹽穀一焚レ臂数過苦修練行計ルニ三年三月
也然トモ諸大夫疑信搢ヒ半終ニ不三以聞二於臺下一ニ師於レ是乎欲下遠ニケ
跡ヲ流俗一以養中恬談上焉先レ是国祷修供ノ之時中宮明神忽
然トシテ来二于師前一作二穭怒之状一欲三百計以怖二畏ント之一師自若トシテ不レ動レ念
稱二誦密呪一神乃告曰汝所願成満ノ之後恐ハ為二邦家一ノ所レ疎セ其
時不レ動レ念亦宜レク如レ此益神明ノ教諭言符二于茲一是歳六月請
告シテ避レ事使下法弟宥観ヲシテ補中其席上社殿ノ白蛇於二是日没矣自二初メ
出一亡慮四年亦異矣哉師深感二時機之不レ熟旦言テ曰我丹
款之不レ達者益仏天未レ棄レ我而欲使我脱名利纏縛而獲
菩提樹王之果□歟抑有為之華報也者得之其易隨
命毀滅非遠伝普潤之謂矣何幸之大也終恬無憾色
視誦益勤又対仏前立無比要誓自作座右銘以□警
策其辞激切著明読者莫弗仰歎焉七八月之間演

暢因縁譬喩以誘導信男信女遠近慕其道華来聚者
絡繹不絶亦授與日課稱名受者三萬有餘人法化稍竣九
月移錫於泉州再住于精修律寺己未春四月　宮内君
早逝権右怵惕師之前言備聞台下公不勝感激乃
命擎願章於観世音暨明神真前其書於今金剛淨院
於是左京君曰就長大提封無不祝其寿自此　邦君固心
神明仏陀焉是乃雷山興復之濫觴也明年春三月有司
様旨一新中宮社壇修覆丈六千眼瑞像尋建立上宮
石龕及下宮社殿益師修徳之所致豈有他哉師自
弱齢以至壮年繭足南北遊泳教海一旦慷慨曰我雖敲
大小教門粗目顕密理味唯古人糟粕而失還源淳
粹不若絶解滅智證得一味甘露於是乎一向純修企
望修證一夏之中修得円明自此恒得瑜伽中徹見月
輪也又恒曰凡修行人依有相而得無相者仏祖遺訓修行
階次固當然矣雖然見世之人眩惑有無名字認妄為真
亦不為不□自今而後初渉行人須先勤修無相之行無相徹

底而後円明自現身有味乎其言之也仏祖之所謂有相也者
出世殊勝之真境也世之所謂有相也者世間所現之妄法也言
同旨異其眩惑也□矣師於此義発明経疏之微旨嘗作
七重秘釈其詞有曰吁嗟国隔萬里時踰千歳雖與三蔵不
得親□必也祖意如是亦足以見其卓識矣修観之暇著述
行要題曰阿字視策観道階漸斯書為最也延享乙丑夏
管神鳳僧寺幹蠱講演律蔵警策闔衆耆徳知師公正百
事委處断衆皆雍欽我親教快然勝公游神鳳之日聞耆宿
語曰伝曰即禅和上之在輪寮也室中恒現月輪師益喜修
秘視也嗚呼声價之高于僧房而信於後世者如此奚啻門
下挙揚之謂已哉宝暦辛未以游方之尅期稍迫欲重請之国
府以図再遊春正月旋錫於本州是時　功崇公以有昇転
之志願命執事謀使師祷之偶有沮之者而止　公密遣磬
御之臣恩命特厚且告以国願成之日永加外護之旨師報
曰法臣雖不承旨乎固沙門之顓職也而況辱恩顧乎何
敢望其報矣乃祷祝明神暨観世音以建首密供居有項

回錫於泉南在精修益加奮厲推誠拝祷其後　邦君
再辱専使国祷之荐至師対曰微僧自奉恩命之後雖
暑流金寒折寒[4]乎不敢厭疲疲勤耳必不朞年而満御願
又抗言曰我菩提成満則国願亦成世間小願不成豈得成
出世大願耶意気頗自得使臣反命　公壮其言感刻彌
深是歳十二月十八日　公奉　台命転任少将邦家之栄自
聖照祖君就封于此州未曾有也相伝公有昇転之希望
十有餘年其願始達矣本藩大邦乎其最為難者如
此非以當今状態可比議者益時運変革之所致識者不
可不斟酌焉壬申夏六月厚幣致命且告以剏一寺於雷山開
法化其言切切不得峻拒是実律院創建之由漸也其八月
十一日理帰檝十九日着博多二十五日執謁府館
公労曰寡人今者之栄実郷之法力耳乎親賜寵章此
日斎施殷盛待遇特厚尋命有司相攸於傘[5][6]蓋神祠
北邊以地狭隘崩丘埋谷衆庶奔走官吏労勤殊甚隔
年而地平結界立法一式律制癸酉冬十月経始就功

4　みせけち「膠」

4　みせけち「笠」
5　みせけち「折」

至翌年甲戌仲秋成更依密軌修行立壇作法以錮悪
鬼邪魅長為僧伽藍界號曰千如寺大悲王院安千
眼大士暨不動明王毘沙門天於堂中亦庋吉祥妙音
二天女于其外院初師帰不動尊求菩提心要期修観
其法六百座誦持其呪六百萬遍益取諸六大無碍身顕
現之義又偶有所感祈冥護於毘沙門頗得霊験安
二尊于大士両脅者益為是歟是歳九月十一日
公召見特命附荘田百石永為寺産併賜白金廿枚
廩奉百五十包以充毎歳祝祷之費供給渥隆且
許以官営之堂宇永加修繕之旨実是　邦君外護之権
輿也翌十二日　公遣使臣致其進山之賀所儀遺昆布
暨紗□二端寵遇之撫人皆莫不歆羨焉自乙丑
春及丙寅秋両界大曼荼羅及諸尊真像秘密潅頂法
具等大氐密院所宜備暨常住資具官給其費悉附之恒
延師於屡詢法義歳時賜賚存問不絶至時或命輿馬師
亦筆呈仏神冥應之秘蘊以奨勧為大法金湯仁慈救世

也　公崇信倍于昔日徧修興邦内社塔加之厚播仁政
闔州嚮其風国家盛典於斯為備実崇三宝之効也
己卯春三月行伝法持明結縁三種灌頂以成新刹開堂
慶讃此日也庭儀厳麗職衆済済見聞緇白頗萠信
心又請準禁闕修法毎歳正月修五壇大法以祝護
国家官可之其壇法軌則拠法流秘訣自編次之今
見在當寺蔵庫當昔有祖述大師三学録復興有部
之師所謂南紀門公芸州如公等是也彼師著真言
律行問答主張高祖門葉須依学有部之旨師以
為継既絶玄綱深感荷法篤志然其立清規也讃寛
勧縦者為不尠矣苟不防於肇興之時恐誤却後
進耶於是作破釋以挫有部師其書名曰旭照霜露編
益取諸慧曦照破彼傲慢之速尋撰秘密尸羅眼髄
陳其所識見有部師又述辨旭照霜露編而闢之師亦
為之摧駁以返詰益二師法戦古今伝而言之抑雖両家
法将互富千義而空有異其岐至慎重僧風以揄揚

祖師之洪範其揆同矣故義虎難決輸贏矣作顧如何惟若学
如師密家爪牙一時俊傑而師與此為筆陳対敵則其
材亦伯仲之間也歟夫文字言句雖非釈門之所専至
伝持法教誘導将来竺乾震旦諸大祖師莫弗依
此豈可與徒弄沙礫人我自隔者同年而論哉宝暦辛
巳至明和乙酉中間六七年修法之外講授與操觚循環
無虚日又伝授野澤法流暨秘密儀軌禀其相承秘訣者
十有餘人生平述作在教相則大日経教主義顕密教時
義密宗網義秘密一乗尸羅眼髄阿字観秘策自誓
受戒方軌旭照霜露編六相自然一掌鏡等在事相
則西院流系統記安流法脈記三宝院相承記三安西
不同記同雑要鈔千手大法次第安流呼麼次第普
通諸尊随行次第西院伝授口訣請雨秘法次第不
空羂索祈雨法止風雨経法建壇結解次第地鎮次第
摩利支天法西院六種護摩通行次第後七日大壇呼麼
壇法則暨後加持等西院灌頂初後夜三昧耶戒作法同流

區區袖中録等拠相承秘訣及本経本軌編集以補其
闕典事教二書凡若干巻焉一日歎曰我衰矣崦嵫
己逼餘年無幾有漏依身実可厭離乃誓於仏曰弟
子而今後雖興法利生因縁現身且措而欲超出世間純
一無雑持念至誠以成報土之荘厳自以従前所修善根
銷滅三毒上首諸煩悩懺悔三世所犯罪障回向無上菩提
道心堅固決定不退順次住詣于安養界値遇諸仏
菩薩開無生恵眼以普現色身能度一切有情倶入仏
恵我願如此誓不求他事焉一宵夢寐之間入七宝
樓閣仰瞻天華繽紛異香馥郁晃郎中見阿弥陀如
来紫磨金色光明赫熾観音勢至翼従左右地蔵大
士在其後半身出現妙相瑞厳不可譬喩師不勝喜
躍頭面接足人之而寤従是之後益固心安養無
量寿瑜誡三千座不空羂索清浄蓮華明王法一
千座精修竣功師自捨学跂足行門其所修密供及
所誦呪経等録而在年譜不載于此平日霊恠不可勝

記或亡魂憑依於人乞師法救或其淫厲者藉師之法
力忽得救援雖然隱而不語且其言曰凡境界之相有真
有偽抑真亦局執則遂隨於魔事也夫如是其感應
召致亦可知矣明和戊子春喜捨當寺於十方僧伽子
院亦以為招提嘱後事于湛道人法監護能事既畢絶
感微恙忍土化義将聲徒第請遺偈師應聲曰幻
化本来從覚心生幻生幻滅本無一物乃結毘廬遮那
法印奄然化逝実明和五年九月二日辰時也法臘三十九
夏世齢六十有四臨滅之時僧衆十二人周匝唱仏號師亦
與俱稱名其声清亮如戛環珮来拜者佇聞之翌日
門人殯浴遺骸四事柔温顔容怡然見者以為未曽
有也衆僧奉擎全身窆于寺後及立牌位闔山晋
議署以當山中興顕號協矣此夜瑞岸夢無数天童
舁其棺槨去識者以為順次往生之明験也其後告知
本者曰我去此在嚫野白雲中経一七日而註詣西方極楽
上品中平日之願足矣又諭誨曰末世行人多逢魔障

漂滔生死深海常守持仏舎利可以防之辟狌水牛
之行巨海中身未到其処先依其勢力折開海水故
持仏舎利則依其威徳之力天魔外道不能親近其
他門人壇越感其註生之相者多云
[7]
賛云大師言之発心遠渉非足不能趣向仏道非戒寧
到必須顕密二戒堅固受持浄戒莫犯竊惟相公少慨
己身之不合仏制奮然抱鴻志訪知識於百城果受得
三聚苾芻戒于大鳥山外依四分本叉而護篇聚内入
一切平等法徧浄自他益欲似続祖師之懿範黼黻覺
王之洪献歟廼開基僧房建立密壇授以法身嫡嫡真
秘者職斯由是旦也凝心月輪深観実践尅證以発揮
先賢未発之微旨固非義学者流之所及也恒以講授誘
誨當世旁事述作裨益後生亦其激昂戟手而軋于
彼薩婆多氏者豈矯世憤弊耶吾察識量顕密無隔事
理融会其於乗戒也可謂兼之矣况又約安養為真帰之
処顛沛於此故終焉之後霊感著顕世之局執教禅掃捨

7 「大師言之発心…中略…州近古無人也」までは大悲王院蔵「実相大和尚肖像」の讃文に同じ

戒律動レ以束縛軽蔑其人者一見師之行実則亦可以自
懲矣若夫應邦家恩命屡得霊徴者益道華之緒餘
土苴歟吁誰謂我西州近古無人也或曰世謂相公嘗為国
精祷也奨勧　　功崇公要興建七堂使雷山伽藍復
古之輪興矣　公若納之則頒国貨而其費不可測焉宰
官沮議者意益在斯歟予之評豈不虚飾乎余曰不然
吾聞之預章始萌含棟梁之態驥兒落地有千里之
勢意者為法匠者自童稚時英気自萌抱非常之志
先哲後哲其揆一也相公當初見霊蹟之荒寂崛起潛二図
重興乃投釈門夫法之所依住則在人興処非人不能以
弘法非処不能以立人人法処苟闕其一則行化之迹幾乎
熄矣以吾言之宝刹締構真無漏純善之功徳何費之
有抑宏広其規彫琢極巧粉彩盡羔者益取諸天宮淨
土使人粛焉発菩提心也故其夙願之所撼誘奨以伽藍
興隆之勝利而終不能賛成国家之美事深知機縁之
不至幹棄浮雲顕栄□益歆艶無為精勤不弛晩

節彌堅由是観之既絶其復興之企望猟如脱離芒屬
雖□米幾其状昇聞有司承命神宇仏閣百廃倶起然則
相公重興之首僧其功亦大矣哉矧夫修供之牀神明臨光
夢徴現瑞而霊感如□響自非護法大士乗願轂□
則孰能爾耶益有宿契也興世之假名芯芻竊吹濫托
者不可同日而語至其受邦家徴請再旋故山為律刹祖
実云師之望外至人之應物不然而然者非耶仏有言
曰欲得無上菩提者諸餘世福不求自至辟諸農夫既收
其実而藁秸并有得焉益金口之言素固不誣也世只
取於興復者為祖翁慙之
全修此伝或発難者曰相公竒蹤異験顕於一世衆機風
靡是以　邦君崇慕乃復起雷山嶽開剏大悲精舍其
澤波及於今日名声亦存于耳伝口碑何假瑣瑣紀伝
而後著之比裁抑後世撰史立論者未免吠声之謂
矣子奚不思焉耶通曰余駈烏時始礼開祖肖像於
饗堂深以想其人稍長読頓上賛辞蜼略知其景行

乎未足罄梗概項得年譜繙閲之乃知為近古一
高僧也有若修徳行実而人之不知也良可惜矣夫物
之湮没也莫若歳月今不纂修之紀伝以貽将来則恐
泯其事蹟矣吾侪稱後裔者不垂念及此而可乎是
余之所以黽勉従事筆削不敢顧譾劣也顧念輓近
諸山法匠豔徳盛葉之不聞于世並多然矣豈翅我
相公乎己哉

慶應丁卯秋九月

法裔芯芻龍尊薫沐敬撰